

## Z106a 15-16世紀イスラーム世界の帝国再編と天文学

星 憲一朗

天文学のみならず、イスラーム世界における科学の展開は人類史上極めて重要でありながら長く古代バビロニアや古代ギリシアの知と近代科学との間のミッシングリンクとなっていた。近年は科学史の分野で研究が進み、モンゴル帝国征服以降のいわゆる「イルハン天文表」の成果の中からはすでにコペルニクスの地動説のアイデアにつながるものがあらわれ、16世紀オスマン帝国のイスタンブール天文台ではティコ・ブラーエの用いた観測機材とほぼ同じものが考案され実用されていたことが指摘されている。また文化人類学的・王権論的観点からは特にモンゴル帝国とその後継国家が天文学を重んじていたことが注目される。王権からすれば暦とは「時間の支配」そのものの象徴である。近代以前、洋の東西を問わずそのベースとなる天文学は王権の中核と密接な関係をもって位置づけられてきた。地動説に始まる西欧の近代天文学がローマ・カトリック教会権力との軋轢を生み（ケプラー、ガリレオ・ガリレイ）その周縁部で展開した（ティコ・ブラーエ、ケプラー、ニュートン）ことは示唆的である。本講演ではモンゴル帝国のバトゥ・フレグの西征以降、モンゴル帝国（フレグ・ウルス）からティムール帝国、オスマン帝国と連なるイスラーム世界帝国の再編を各々の天文台（マラーガ、サマルカンド、イスタンブール）と天文学者たちの足取りを辿ることを通し、天文学と王権との関係性の展開を帝国の再編という文脈で再整理を試みる。歴史学と文化人類学の接点である王権論のテーマからさらに天文史学との接点を探るものである。